

1. アイヌ文化の始まりとチャシ

地域産業
国際理解

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

① アイヌ文化の全体的な特色



伝統的な「コタン(集落)」のイメージ。

(帯広百年記念館蔵:※1)

12～13世紀ころを境にして、北海道に住む人々(アイヌの人々)の文化は、それまでの「擦文文化」から大きく変わっていきます。これ以降の文化を「アイヌ文化」といいます。

自然の中での植物採集、魚とりや狩りを中心とし、かたわらでヒエやアワなどの農耕が行われる、という暮らしは、擦文時代の時と変わらず続きます。

しかし、縄文時代からおよそ1万年の間使われてきた「土器」(→p 83)がなくなっていき、煮炊きには鉄のなべが使われるようになりました。

鉄製品は、本州などから交易で手に入れ、そのまま使ったり、加工して作り直したりしました。

(→擦文時代 p 102、→縄文時代 p 84)



アイヌ文化では、床をほりこまずに壁を立ち上げた、平地式の家(チセ)がつくられた。上士幌町「東泉園」。(上士幌ウタリ文化伝承保存会)

床をほり下げない「平地式」の家

北海道の家については、地面をほり下げて床にする「竪穴式住居(→p 85)」がつくられなくなります。

かわって、地面は平らなままで垂直な「壁」を立ち上げた「平地式住居」が作られるようになるのです。ちなみに、アイヌ語で家のことを「チセ」といいます。(→p 130)

また、擦文文化では作られていた「かまど」が作られず、家のまん中の炉になべをつり下げて、煮炊きをするようになりました。

交易の民

擦文文化以前にも、北海道以外の地域との交流があり、物や文化の行き来がありました。アイヌ文化ではさらに交易がさかんになり、アイヌ文化の内容にも大きな影響をあたえました。

本州やサハリン・大陸へは、コンブなどの水産物や動物の毛皮が送られ、本州からは鉄の道具やうるしぬりの器、木綿の布などが、大陸・サハリンからは絹や綿の服にガラス玉のかざりなどがやってきました。

また、北海道のアイヌ民族は、北の産物を本州へ、本州の産物を北へ送ると、「中継基地」の役割もはたしました。



ユクエピラチャシ跡(陸別町:→p117)で見つかった中国銭「皇宋通宝」とガラス玉(身をかざるもの)。交易によって手に入れたもの。(陸別町教育委員会)

※1 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

※2 竪穴式住居(たてあなしきじゆうきょ): 同じアイヌ文化でも、サハリンやウルップ島より北の千島列島では、竪穴式住居がつくられていた。